

2020年日本農業史学会・学会賞候補業績募集および研究報告会のお知らせ

会員各位

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日本農業史学会より標記の件について、以下の通りお知らせします。

(I) 2020年日本農業史学会賞（学会賞・奨励賞）候補業績の募集

以下の通り、2020年日本農業史学会賞（学会賞・奨励賞）候補業績を募集いたします。

【学会賞】 (1) 対象者：優れた研究業績を公刊した40歳以下の会員（研究業績刊行時点）

(2) 対象業績：過去2年間（2018年1月～2019年12月）に公刊された著書およびそれに準ずるもの

【奨励賞】 (1) 対象者：将来の発展が期待される研究業績を公刊した40歳以下の会員（研究業績刊行時点）

(2) 対象論文：過去2年間（2018年1月～2019年12月）に公刊された論文およびそれに準ずるもの。

【応募方法】：本会会員の推薦によります（著者自ら推薦することを妨げない）。推薦に当たっては、所定の推薦書を付してください。一度対象となった業績の再応募は認められませんが、同一人物でも別の業績であれば差し支えありません。

推薦書および対象となる業績（著書の場合1部、論文の場合5部（コピーでも可））を事務局までご送付下さい。締切りは、2020年1月末日といたします。

「推薦書書式」は、学会HP（学会規約→日本農業史学会賞表彰規程細則→「別添書式（学会賞推薦書）」または「別添書式（奨励賞推薦書）」）からダウンロードしてください。

<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/institution.html>

学会賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki1.doc>

奨励賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki2.doc>

なお、学会賞と奨励賞はそれぞれ別の書式を使用することになります。ご注意ください。

(II) 2020年日本農業史学会研究報告会に関するお知らせ

先にお知らせしましたように2020年の日本農業史学会大会を下記要領で開催します。

記

日時：2020年3月27日（金）

午前：個別報告、午後：大会シンポジウム

会場：東北大学・青葉山キャンパス・青葉山コモンズ2F第5講義室

http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/aobayama/new_aobayama_map.pdf

①個別報告の募集について

個別報告をご希望の方は、下記要領にて電子メール（ないし郵便）で学会事務局までお申し込みください。

1) 必要書類：申込用紙（氏名、所属、報告タイトル、連絡先、メールアドレス）

および報告要旨（1,000字以内）。書式は任意です。

2) 申込期間：2019年12月23日（金）～2020年1月31日（金）（すでに受け付けています。）

3)申込先：学会事務局まで。

メールの場合：office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵送の場合：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻比較農史学分野気付

日本農業史学会事務局まで

なお、報告時間は最長で50分（報告40分、質疑応答10分）を予定しています。（ただし報告者数が多い場合には短縮されることがあります。あらかじめご了承ください）。

会員各位の積極的な応募を期待しております。大会プログラムは2月上旬にメールにて改めてご案内する予定です。

②2020年日本農業史学会シンポジウム

「太平洋世界における近代糖業と帝国：移植（Transplantation）」

オルガナイザー：森 亜紀子（同志社大学）

【趣旨説明】

シドニー・ミンツ『甘さと権力—砂糖が語る近代史—』（注1）によって切り開かれ、＜カリブ海—ヨーロッパ＞を主な対象として蓄積されてきた「砂糖」をめぐる歴史研究は、後発の近代製糖地であり、それゆえ従来の糖業史において周縁化されがちであった＜アジア＞に焦点を当てた意欲的な研究の登場により、近年新たな展開を迎えつつある。ウルベ・ボスマ他『砂糖生産圏の再訪—アジアと南北アメリカ大陸における砂糖と植民地主義、1800-1940—』（未邦訳、2007年、注2）は、この展開を推し進めた急先鋒とも言える論争的な良書である。ボスマらは、1900年代にキューバ・ドイツに並ぶ産糖地となったジャワに着目し、先発のカリブ海糖業がヨーロッパ列強による奴隷制貿易・プランテーション経営という暴力・強制に基づく比較的シンプルなシステムに依ったのとは異なり、ジャワ糖業の場合には、長い植民地化の過程で存在感を強めていたクレオールが植民地資本家として台頭し、賃金労働者だけでなく小農も砂糖生産をめぐる重要な行為者となるなど、より複雑で流動的な社会状況を生み出しつつ運用されていたことを明らかにした。日本においては、平井健介『砂糖の帝国—日本植民地とアジア市場—』（2017年、注3）が、ジャワ糖には及ばずとも同時期に急成長を遂げた台湾糖業を中心に据えながら、同時に帝国日本全体の糖業の形成史を丹念に検討し、それがいかにジャワ糖の存在に深く規定されていたのか、いかに中国・香港をはじめとするアジア市場と密接に結びつきつつ存立していたのかを明らかにした。従来個別に論じられてきたアジア諸地域の糖業の関係性と特質を浮き彫りにした両研究の登場により、本来世界商品である砂糖の、カリブ海・ヨーロッパ中心史観が大きく揺らがされ始めたと言えるだろう。

本企画では、これらのアジア糖業史研究の成果を参照しつつ、アジアよりも一層周縁化されてきた＜太平洋世界＞を主舞台に据えることにより、糖業史をめぐる議論をより豊かにすることを目指したい。具体的には、1800年代半ば以降から1920年代までの間にハワイ・台湾・沖縄・南洋群島といった島々で次々と興された近代糖業が、植民地官僚・実業家・技術者・研究者・画家・移民などの多様な行為者の移動経験と他者接触を通して、どの様に関連し合い、時に絡まり合いながら展開されたのかを、＜移植(Transplantation)＞というキー概念を用いて明らかにする。本企画の報告者であるデューゼンベリ・飯島によって提起されたこの概念(注4)は、近年注目されている人の移動のみならず、苗などの植物・製糖機械・農場経営システム・それらを表象する絵画・思想の移動を含むものとして提起され、さらに、移民研究(ex.ハワイ)/植民地研究(ex.台湾・南洋群島)/日本史の間の分断を架橋する概念として位置づけられている。本企画では、このデューゼンベリ・飯島の提起を踏まえ、ハワイ・台湾・沖縄・南洋群島という地域間の、従来は見過ごされてきた関係性・連関を浮き彫りに

し、太平洋世界における近代糖業と帝国経験の意味について議論していきたい。

デューゼンベリ報告は、1880年代中頃からハワイ糖業の主要労働力となり始めた日本人移民の存在に着目し、ハワイの甘蔗畑でくつろぐ日本人家族を描いたある有名な絵画のゆくえや山口県室津村からマウイ島へ渡った移民の経験を辿ることを通して、ハワイ糖業における日本の存在の重要性のみならず、日本近代史におけるハワイ糖業の重要性をも指摘する。飯島報告は、1900年代初めにハワイから台湾への製糖技術・知識の移転が行われた事実を掘り起こしながら、1930年代中頃に台湾政界・実業界において「台湾はハワイの後継者」とする物語が確立されるまでの過程を検討する。台湾糖業を対象に据える坪田＝中西報告は、飯島が明らかにする製糖工場レベルにおけるハワイ糖業の技術・知識の「移植」が、農場レベルにおいては失敗し、会社直営農場型と小農からの買い取り型が混在する形態が生まれる過程を丹念に追い、同時に、当初直営農場型の労働者として招致された日本人移民に労働者ではなく統治者としての役割が求められていったあり様を明らかにする。森報告は、世界においても日本帝国内においても後発の産糖地であった南洋群島(北マリアナ諸島)の糖業が、先発産糖地域(ルイジアナ・台湾・沖縄)の影響を受けつつ独自の形態を選び取っていった過程を辿り、それが北マリアナへの主要移民送出地だった沖縄本島中部農村の人々の生活世界にどのような変化をもたらしたのかを明らかにする。

コメンテーターは、『砂糖の帝国』の著者である平井健介さんと、『他者たちの農業史』(注5)の著者であり、旧植民地出身者・海外移民など移動した人々と日本農村との関係性を考察されてきた安岡健一さんをお願いしている。司会はドイツ・日本の食と農に関する幅広い研究を展開されてきた藤原辰史さんをお願いした。

(引用文献)

(注1)シドニー・ミンツ『甘さと権力—砂糖が語る近代史—』平凡社、1988

(注2)Ulbe Bosma, Juan Giusti-Cordero & G. Roger Knight, *Sugarlandia Revisited: Sugar and Colonialism in Asia and the Americas, 1800 to 1940*. Berghahn Books, 2007.

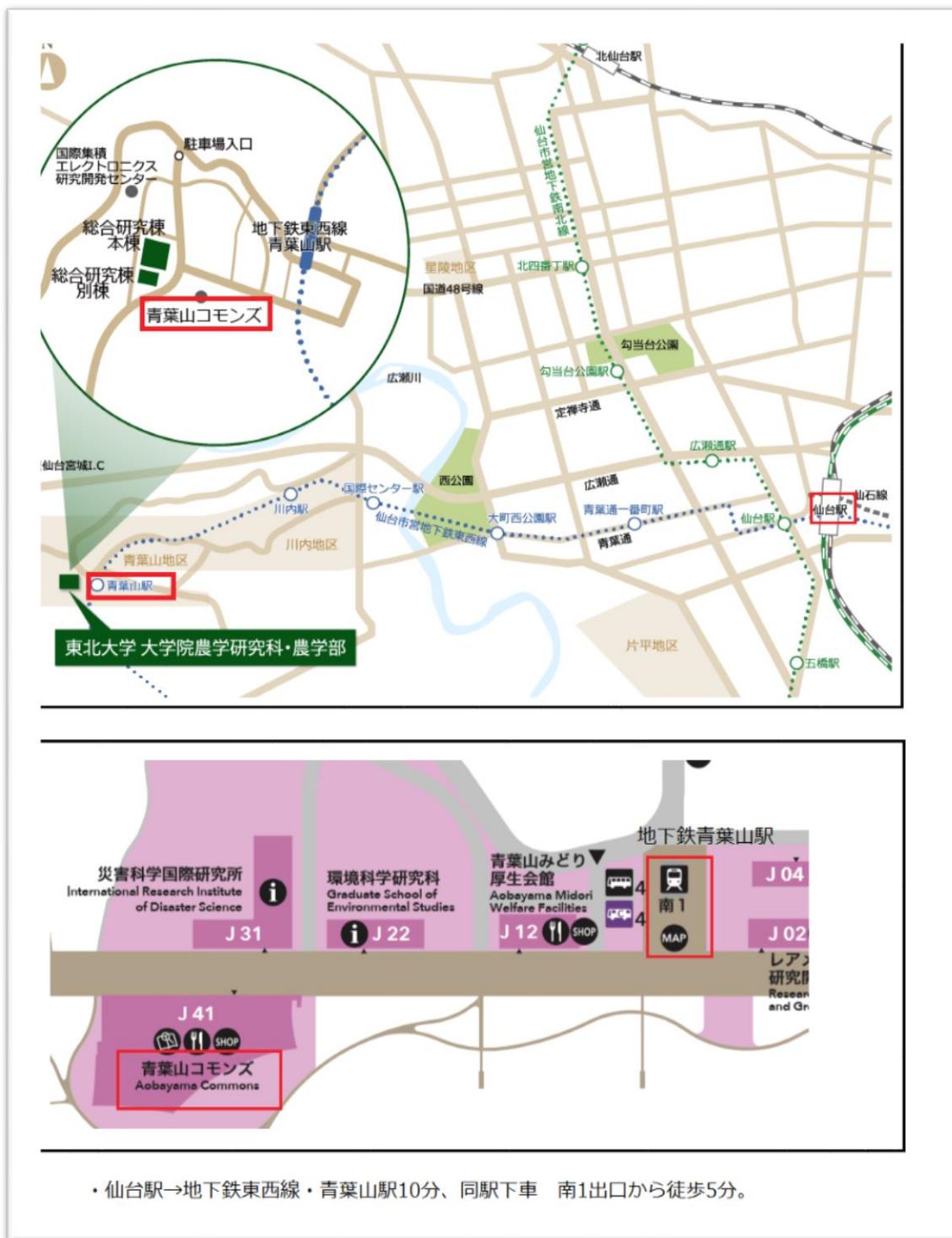
(注3)平井健介『砂糖の帝国—日本植民地とアジア市場—』東京大学出版会、2017

(注4)Dusinberre, M., and M. Iijima. "Transplantation: Sugar and Imperial Practice in Japan's Pacific", *Historische Anthropologie* 27, 3: 325-335, 2019.

(注5)安岡健一『「他者」たちの農業史—在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民—』京都大学学術出版会、2014

- ・司会：藤原 辰史（京都大学）
- ・趣旨解題：森 亜紀子（同志社大学）
- ・第1報告：マーティン・デューゼンベリ（チューリッヒ大学）
「『我が身はどこへ流るやら』—グローバル・ヒストリーの視点からみたハワイに初めて渡った日本人移民の労働構成—」
- ・第2報告：飯島 真里子（上智大学）
「二つの帝国と近代糖業—ハワイと台湾をつなぐ移動者たち—」
- ・第3報告：坪田＝中西 美貴（上智大学）
「帝国の農業労働者—台湾近代糖業のなかの日本人—」
- ・第4報告：森 亜紀子（同志社大学）
「〈楽園〉の構造—北マリアナ諸島の南洋興発(株)糖業と沖縄中部農村をめぐる民族誌—」
- ・コメンテーター：平井 健介（甲南大学）
安岡 健一（大阪大学）

(会場案内)



日本農業史学会事務局

office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵便振替口座 00180-9-20117

(連絡先) 〒606-8502 :

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻

比較農史学分野気付

Tel : 075-753-6184(足立)、Fax 075-753-6191